現実的世界のうちにおける行為と〈自己〉の破滅

――パトゥーサンの『ロード・ジム』

黒瀬恭子

はじめに――ふたつの忠告

日常的世界は、必ず〈制度〉という構造をもつ。* 船長ブライアリは、世界と個人との関係を、個人の〈制度〉へのアンガジェとして説いた。このアンガジェによってのみ、個人は存立し得るのである。さらにフランス海軍中尉は、個人はその行為を「習慣」化すなわち〈制度〉化することによってのみ、ひとかどの人物たり得ると説く。そして、個人というものが、たとえ自己の全行為を〈制度〉化し得ないとしても、個人の行為のうちには〈制度〉という網の目をくぐり抜けてしまうものが常にあるとしても、少なくとも自らの帰属する〈制度〉を崩壊せしめない程度には、その行為を〈制度〉化するということが、〝社会人〟としての個人には絶対に要求されるのである。

他方、ロマンティックな性向の持ち主でありながら、その性向に現実的判断をつき添わせることを忘れることがなかったシュタインは、まぎれもないひとかどの人物である。しかも彼は、蝶の収集家として、きわめて個人的な願望の実現者でもあった。彼が、立派な〝社会人〟であるということと、同時に個人的な夢を実現させた幸福な人物であるということの根柢には、このふたつの事態に共通のものとして、彼に固有の、現実に対する態度が存しているということは既に述べたことがある。そのシュタインによって、より抽象的なかたちで、〈自己〉実現のしかたが語られてい

た。そこでは、人間が自分の夢を実現させるには、現実の力を自らの力に組み入れる――乃至は現実の力に自らの力を組み込む――ことが肝要なのであって、決して自分一個の力を無闇やたらに振りまわしてはならないことが強調されるのである。

前稿において我々は、人間の行為が必ず二重性をもつという観点から、この作品の主人公ジムの行為のもつ社会的意味と個人的な意味の間にある懸隔を明らかにし、その上で、〈個人〉と〈世界〉との確執の場としてのジムの前半生に解釈をほどこすことを試みたのであった。ひとつの行為のもつこのふたつの意味は、必ずしも矛盾するものではなく、むしろ両者を截然と分かつことこそ困難な場合が多い。しかしいま議論の都合上、仮りにこの両者を明確に異なるものとしてみる観点を採用するとすれば（このような手続を採ることの正当性は、後論が自ずから証明してくれるであろう）、ブライアリ及び海軍中尉による忠告は、人間の行為を社会的なパースペクティブの内においての発言であり、シュタインの忠告は、むしろ個人的な願望の実現としての人間の行為という側面に焦点をあてたうえでなされたものであるといえよう。いずれの場合においても、その場その場の現実のうちに〈自分〉を投げ入れることでこそ、〈自分〉というものが成立していくことが述べられているのである。

このようなアドバイスをうけながら、しかし実際には、これらの忠告はいずれもマーロウの胸の裡にしまわれたままであり、したがってジムは、それらの教えるところを我がものとすることはない。彼は「落伍者」としての意識を強烈に抱きながら、しかも「千載一遇のチャンス」（一七七頁）**として、パトゥーサンの地へとはいって行く。すなわち、「落伍者」という負の立場から、漠然と「隊列のなかのささやかな位置に憧れる」（一六五頁）きもちを胸のうち深く抱きながら、その失地回復を望み、しかもそれをヒロイズムによって華々しく補うという願望を決して捨て去ることなく、すべてをそのための「機会」として捕えようとしつつ。本稿においては、ジムの抱いたこのような願望のゆくえ――それが、如何なる形で実現され、如何にして自壊してゆかざるを得なかったか――が追われることになる。

I 〈制度〉としての現実的世界の確立と〈自己〉のその世界への統合

パトゥーサンという舞台に於いては、ジムは、それ以前の彼からは予想もできぬ立派な姿で我々の前に現われる。彼は、持ち前の才覚で、――しかも、彼がこの地の人々にとって異人種であるという事実に必然的に伴う神秘感を無意識のうちに利用しながら――この地の不断の抗争という泥沼状態を拾収することに成功し、人々から Tuan Jim(Lord Jim) と呼ばれるまでになったのである。信頼すべき友、愛情によって結ばれた恋人、忠実な下僕、そして人々の尊敬と信頼を得たジムは、この地において、自分がかつて夢みたことのすべてに亙って、我々の予測をはるかに越える成功を収めたかに思われるのである。人々が彼に与えた呼称は、いまや彼が社会的に認められ、しかも非常に高い評価をうけていること、また彼が稀有のチャンスを捕え、〝英雄〟となるという自らの夢をついに現実のものとしたらしいことを示

している。

しかし、果たして本当にそうであるのか。事態はさほど単純なものではないのではないか。我々はさらに考察の歩を進めて、彼の望みが如何なるやり方で実現されているのか、それをまず問わねばならない。

ジムは、これまで抗争と圧政の跋扈していた混乱のこの地に、安定した秩序をもたらすことに成功する。すなわち彼は、諸勢力間の関係のうちに一応の安定をもたらすことによって、ある一定の〈制度〉をつくり出したのである。謂わば「過去をもたない」この土地に於いては、「彼の言葉がその日その日の唯一の真実として」受けいれられるようになった訳である（一九九頁）。「すべての人が明日について確信のもてる、平和な、秩序ある生活の社会組織」（二七四頁）を打ちたてたジムは、住民たちにとっては、「地上のもろもろの制度（institutions）の安定性」（二八五頁）を保証するシンボルなのであり、―― 本論におけるひとつの重要な鍵概念である「制度」という語が、作品のなかにおいてもまた、このような文脈のうちで用いられていることに特に留意されたい ―― それゆえに住民たちは彼を敬い、崇拝の対象としたのであった（例えば一八三―四頁参照）。

「外の世界」にいたときのジムの姿に比べ、これはまた何という変わりようであろうか。〈制度〉に対して極端に冷淡で、〈制度〉を揺がしかねない行為のために、その世界を追われたジムが、ここでは期せずして〈制度〉に参与する者となったばかりか、その〈制度〉を集中的に表現する存在になっている。しかも、彼は人々の信頼に応えることで、〈制度〉を支え安定させることに完全に成功しているのである。

この場合の〈制度〉とは、言うまでもなく、船乗りの職業を支える〈制度〉のように、既に広く一般に認められたものではなく、謂わばジムがその要となって新たに打ち建てられたものである。しかしいったん成立してしまった以上、それはまさしく文字通りの〈制度〉として、換言するならば、個人を超えた客観的なあるものとして、その力を発揮し、個人を規定し始める。すなわちそれは、そのうちに於いて生を営み続け、そのうちに然るべき地位を保ち続けようとする如何なる者に対しても、一定の役割を押しつけてくるものなのである。そしてこのような観点からみる限り、パトゥーサンに成立した〈制度〉は、船乗りたちの形成している〈制度〉となんら択ぶところがないといえる。

ジムもまた、この役割を自覚的に、そして積極的に果たすことによって、この〈制度〉の存立を支える。そして、この地に於いて彼に与えられた役割とは、自らこの〈制度〉の頂点に立ち、この〈制度〉を守り続けようとすることにほかならない。

そのゆえにジムはまた、この地に成立した〈制度〉を、自らを支え、何ものかであらしめるもの ―― すなわちこの地の〝ロード〟としてのアイデンティティを与えてくれるもの ―― と認め、この〈制度〉のうちで、人々の〈期待〉を感じつつ、この〈期待〉に沿うかたちで自己形成を遂げようとしているのである。彼は、この〈制度〉の拘束力を、他者のまなざしを通じて感じとりつつ、それに応え、さらにそれを責任感として内在化させていったのである（例えば二二三頁参照）。まさしく、ここでジムは、ブライアリや海軍中尉によって要請された人物となった訳である。

ジムのパトゥーサン入りは、もとはといえば「前後のみさかいもない脱出」であり、「逃亡」であった（一六八頁）筈である。しかし彼の個人的〝英雄〟志向が、まずは、社会的にも意味をもちうるような行為として実現され、成功を収める結果となったのである。我々からみるならば、かかる非常に幸運な事情がここにはあるといえよう。そしてさらに、この地に定住を決意することで、社会的に十分「面目」をほどこし続ける人間として――ただ一度英雄的行為をなしたことのある人間としてのみではなく――〈自己〉を定着させることに彼は成功する。すなわち、ジムの行為は、初めて社会的側面からも個人的願望のうえからも満足のいくようなものになることを得たのである。いまや彼は、〈ひとかどの人間〉であり、且つ〈夢を実現させる人間〉であるような人物として、全く新しい生に乗り出したのである。

それでは、ジムは、以前に彼を悩ませていた、社会的にも認められず、また彼自身としても承認しがたい、現実の〈今ある自分〉と、個人的願望の反映であり、潜在性でもある〈本当の自分〉の間の矛盾（これに関しては前掲拙論を参照されたい）をついに解消し、現実的でしかも肯定し得べき〈本当の、勇敢なる自分〉に安んずることを得たのであろうか。

Ⅱ　〈世界〉への意味付与

ジムをパトゥーサンに訪ね、彼の途方もない成功を目の当りにしたマーロウは、ジムが〝偉大なこと〟を成し遂げたことをはっきりと認めながらも、そのことを手放しで喜ぶ気にはなれない（一六五頁）。マーロウの見たジムは、自信と威厳にあふれる存在であると同時にまた、その自信と威厳には凡そ相応しくない、不安に苛まれている存在でもあるのである。ジムが、心胸において過去の不名誉をたえず現在として感じないでいられないということを、マーロウは、彼自身の表白から知らされる（二二三―四頁）。その不安は、決して具体的な根拠をもつものではなく、むしろほとんど完全に彼一個の心中に抱かれた、ただ漠然たる不安にすぎない。そしてこれが、ジムの、パトゥーサンでの〈自己〉に対する判定、すなわち「ほとんど満足している」（二二四頁）という判定において、唯一不満足な点として――それゆえ、決して「すっかり満足している（*quite* satisfied）」ではなく、「ほとんど満足している（satisfied… nearly）」なのである（二三八―九頁参照）――彼を悩ませているものであろう。

ジムは、この地で既に確立した〝ロード・ジム〟としての〈自分〉像を守り続けることで、この不安を克服しようとする。この地の日常生活の平和のために〈制度〉の安定を図る、つまり、〈制度〉の守護者としての自分の役割を、常に、首尾よく果たし、人々の期待を必ず実現するという役を演じきることによって「目をさますたびに、」だれも自分の過去を咎め立てするものはおらず、「自分が信頼されているということを感じる」ことで内心の不安を打ち消すことを通じて自信をとり戻すことが、自らが生きてゆくために絶対に必要であると彼は考えるのである（一八一、二二三―四頁）。

マーロウに対するジムのこの告白には、格別の留意を払う必要

がある。だれの眼にも堂々たる威容を誇っているかにみえるこの人物の内心の不安を照らし出すことで、彼の前半生における姿と現在の姿との間の異和感を減じ、両者の間につながりをもたせるという、単にそれだけの意味で、ジムのこのような発言が挿入されていると考えられてはなるまい。我々の文脈にひきつけて言うならば、ここに我々は、個人の、〈制度〉に対するある微妙な関わり方を看てとることができる。彼が、斯くの如く優秀な〈制度〉の守り手となって、その安定に力を尽くすのは、今となっては、この地に成立したこの〈制度〉のみが、彼を〝勇敢にして誰からも頼られ必要とされる人物〟たらしめるのであることを、彼が認めるからにほかならない。ある〈制度〉を脅かすような行為をなすことによって、ひとつの社会のうちに生きる場所を失ってしまったジムは、なんとかして、この過去の負い目を解消したいと願う。その「機会」を与えられた今、彼は、以前彼が〈自己〉実現の方法として想定していたのと同様の、〝英雄たること〟、そして〝英雄たり続けること〟を以て、過去の汚名を雪ぐ方途としようと考えるのである。我々が期待するように、今度こそ〈制度〉を支えぬく〝社会人〟となることによってではなく。

前に我々は、ジムの〈制度〉に対する関わり方から、パトゥーサンに於ける彼は、ブライアリやフランス海軍中尉によって要請された如き人物となったのであると考えた。しかし、以上の点に留意するならば、ブライアリや中尉によって要請された人物像と、パトゥーサンの世界におけるジムのあり方との間にある、決定的な相違を見逃すことはできない。すなわち、彼が〈制度〉を支えようと意図するのは、専ら、自らがその〈制度〉の頂点、或いは中心に位置するからにほかならないのである。すなわちこの〈制度〉は、彼の自己の生に対する個人的な意味づけ――〝英雄的であるべき自分〟――を充足してくれるものなのである。彼がもしこのパトゥーサンに於いても、曾ての船乗りの世界に於けるのと同じように、〈制度〉の片すみで、無名の存在として〈制度〉を支えることを要請されるとしたならば、彼が今の場合と同じように、〈制度〉内での自分の持ち場を自覚を以てしっかりと守ろうとしたであろうとは、我々にはとても予測できない。なぜなら、その持ち場の地味さゆえに、彼はそれに特別な個人的意味を付与し得ないであろうし、そうなれば、その持ち場をあくまで守れという要請が彼に対してもつ力は、大幅に減じられるであろうから。（もっとも、彼は、今やパトゥーサン以外の何処に於いても、自らの存在の場を見出し得ないであろうという事実を度外視すれば の話ではあるが。）それゆえ、彼にとっては、相も変らず、自己の生に対する個人的な意味づけが、外界が彼の生に対して付与する意味づけに優先しているのである。彼が、外界が彼の生に対して付与する意味づけを受容するのは――パトゥーサンの社会の内なる〈制度〉の維持という役割を自覚的に遂行するのは――あくまでも、自らの生に対する個人的な意味づけを充足させるための手段にすぎない。換言すれば、彼にとっては、自分が今〈制度〉のうちで自分に割り振られた役割を立派に果たしている、ということ自体が、自信――これこそが人々が日常生活に於いて抱く自信にほかならない――の源泉となっているのではなく、むしろ、その役回りの華々しさこそが、内心の不安を打ち消し、かつ彼に固有の〝自信〟を抱かせるという機能を果たしているのである。

あれほどまでに〈制度〉に対して冷淡であったジムの、驚くほどの変貌ぶりは、実はやはり〈制度〉に対するきわめて彼らしい姿勢――個人的意味のために、〈制度〉を謂わば利用するともいうべき――が、彼に纏わせることになったひとつの衣装にすぎなかったことを忘れてはなるまい。

しかし、言うまでもないことであるが、ジムはこの芝居を決して気軽に演じているのではない。〝英雄たること〟という、自らのたてた理想に憧れれば憧れるほど、且つ一方で、過去の負い目を強く感じれば感じるほど、彼は、今の自分像を守ることに執着する。そして、個人的な意味を付与されたこの自分像を守ろうとすれば、そのことが、取りも直さず、この〈制度〉を守ろうとする、彼の一途な姿勢を――したがって〝社会人〟としての外観を――形成してゆくことになるのである。

この自らの役目に対する彼の真剣な心構えを、我々は、例えば、彼が、毒入りの可能性もある、ラージャのコーヒーを飲むという行為を、一再ならず、すすんで行っているという、一見不可解な事実にみることができる（一八四頁、また二四五―六頁参照）。それ自体としてはおよそ無意味で、滑稽ですらある、この莫迦げた行為を、彼は一命を賭して遂行する。それは、彼がこの行為を、〝ロード〟としての自らの〝勇気〟と〝自信〟を周囲に〝証明〟する、謂わば儀式と看做すが故なのである。この儀式を通じて示された彼の威勢のゆえに、ジムをその頂点とする〈制度〉としてのパトゥーサンの社会は、その構造的安定性を保持しているのである。それゆえに、ジムの信ずるところによれば、このような示威行為としての儀式の忠実な遂行を、住民たちはジムに〈期待〉しているのである。

彼は、曾て「機会」を捕えて〝英雄的〟な行為をなすことで、自らの〝勇敢さ〟を〝証明〟しようと夢想した。しかし、同じ〝勇敢さ〟を〝証明〟するための行為であっても、今のジムのこの現実の行為の内には、曾ての――すなわち船乗り時代の彼の思いつきの世界でのそれとは比較にならぬほど思いつめたものがある。確かにこの行為の直接の意義は、〈制度〉＝秩序を支えるために、ラージャを圧倒し、彼に対して睨を利かせるというところにある。しかしながら、今のこの〈自分〉像を支えるものとしてのこの〈制度〉を文字通り死守しようとする――見掛けの莫迦らしさからは想像もつかぬ――彼の悲壮なまでの覚悟を、我我はそこに看て取り得るのである。

さて、〈制度〉に対するジムのこのような関わり方は、彼とパトゥーサンの住民たちとの関係に、これまた聊か微妙な形式を与えることになる。ジムがこの地の住民を愛したのは、彼らがジムに対して従属的な役割を演ずることで彼を〝ロード〟とするがゆえであり、そしてそれによって、「外の世界」から石以て追われた彼に対して「名誉挽回の確信を与えてくれた」（一八二頁）がゆえであったとみなすことは正しいであろう。さればこそ、マーロウが感じたように、その愛は、「一種凶暴なエゴイズム、軽蔑をふくんだ親愛感、という感じを免れない」ものなのである。すなわち〝ロード〟としてのジムは、住民たちをいわば「持主の目を以て」見ていたのである。しかし、マーロウは、住民たちが「指導者たるジム」の〝所有物〟であるよりも、むしろジムが彼

らの「虜囚」となっているということの方が、印象としてはずっと強烈であるという感想を、至る所で繰り返し述べている（一八二、一九二、一九五頁等参照）。今や人々から〝ロード〟の呼称を与えられるようになった人物にとって、自由で気儘に振る舞うことが許される余地がきわめて狭いものになってしまったことは当然であるにしても、単にこのようなきわめて一般的なことのみに、マーロウの右のような印象の根拠は求められるべきではあるまい。むしろここには、ジムと住民との特別な関係が反映していると考えるべきであろう。

まず、住民の意識からすれば、ジムは、彼らには理解できない「謎」（二二四頁）であり、且つ彼らを超えた絶大な力を具えているに相違ない〝white lord〟である。そして、彼らとは異次元の、全身白ずくめのこの人物に垣間見られる影の部分が、ときとして彼らにあるうさん臭さを感じさせてしまうことがあるとはいえ、しかし、ともかくジムは彼らに平和と日常生活の安定を保証してくれる存在なのである。そして、少なくとも目下のところは、この安心感はジムを通じてこそ得られるのであるから――つまりこの秩序の安定は、一元的にジムというひとりの人物にかかっているのであるから――彼らがこの「謎」の人物に日夜注目し、「見張って」いたのも当然のことである。

一方、ジムの方でも、秩序の安定が偏に自らの双肩にかかっているというこの事実を知悉していたからこそ、既に述べたように、自分はこの地でこの住民たちによって「名誉挽回の機会」を与えられたと考えたのである。しかし、さらに考えるならば、ジムが、その挽回された〝勇敢な自分〟を保ってゆこうとすれば、この像を支え、それに現実性を与え、それによって彼の〝勇敢さ〟の証人となる、この地の住民たちを是非とも必要とすることになるのである。ジムは、彼らを自らの姿を映す鏡としてエゴイスティックに愛してはいる。しかしジムの方こそ、もはや彼らなしではやってゆけない立場となったというのがむしろ真相なのである。ジムが、自分はこの地を離れる（homeへ帰る）つもりはないことを幾度も言明しているのは、彼自身このことを強烈に意識していたからに他ならない（一八一、二二三、二四五頁）。

このように、相手を互いに手段として看、愛し、必要とするという両者の態度が、両者の関係に微妙な形式を与えたことは容易に理解し得よう。表むきの主人（lord）――従属者の関係の下には、実は全く逆転した関係が身を潜ませていたのである。

この表面下の関係が、如何なるきっかけで顕になり、どのような事態として自らを主張するのであるか、それを、この主人公の一生の結末に於いて看ることにしよう。

Ⅲ　〈制度〉としての現実的世界の破綻と意味の喪失――ジムの失脚とその死

前述の如く、ジムは、自己の生に対する個人的な意味づけを現実化するものとしてのみ、この地に成立している〈制度〉を尊重し、またそのような意味づけの現実化という事態を構成する不可欠の要素としてのみ、住民たちを愛した。これに対し、住民たちは、ジムを、自分たちの日常生活の安定を保証してくれる、秩序の保護者としてのみ、敬愛し、服従する。窮極的には、互いに互

いを手段とするような、このような関係にありながら、パトゥーサンの社会はその構造的安定性を比較的長期間に亙って保ち続けることになる。しかし、これは何ら不思議なことではない。〈制度〉の安定性を支える個々人が、内心どのような思いを抱いているかということは、〈制度〉が正常に機能するか否かという点に関しては、さほど直接の大きな問題とはならない。住民がジムを超自然的存在であると信ずるという錯誤に陥っていようと、ジムが住民たちの日々の生活を心中で半ば軽蔑していようと、きわめて微妙な均衡の上に成り立っているとはいえ、双方が各々の役割を大過なく果たし続ける限りに於いては、何ら現実的な問題は生じないのである。ともあれ、ジムはこの地の平和を命がけで守ろうとしているのであり、住民の方では、ジムを中心とする〈制度〉の存在を認め、且つ生活全般に亙ってジムを信頼してその指示を仰ぐというやり方で、意識的であると否とを問わず、やはり〈制度〉の安定に寄与しているのである。しかし、双方のいずれかが、自らに振り当てられた役割を首尾よく果たせないことがあれば、この謂わば同床異夢の関係の真相が白日のもとに晒されるのであり、〈制度〉全体は途方もない破綻を来たすことになる。その破綻は、ジムの側の役割の遂行の失敗とともにやってくる。ブラウンというならず者の出現を機にして。

パトゥーサンの平和を乱すこのならず者に、ジムが逃亡の機会を与えたのが、ブラウンへの同情のためであったか、或いは自らにブラウン征伐の資格の有無を問うたためか、またブラウンが白人であったこともそのことといくらか関係があるのか、それは定かではない。おそらく、これらのうちのいずれもが、彼にそれなりの作用を及ぼしたであろう。ブラウン解放にあたってのジム自身の言葉から判断すれば、「人と比べて特別わるい人間でなくても」「運が悪ければ」悪いことをするような羽目になりうる（二八九、二九一頁）という確信をジムが抱いていたことは確かのようである。あたかもブラウンに投影した自らの過去を、不運のせいとして哀れみ、赦そうとするかのように。

ともかく、マーロウの言葉をひくなら、ジムにとってブラウンは、自分が「生きてゆくに耐えなかった『向うの世界』から来た白人」（二八四頁）なのであった。すなわちジムは、ブラウンを、現実のこのパトゥーサンの地に訪れ、その平和を掻き乱す、現実の脅威として捉えることができないのである。

住民の信頼を一身にうけている、パトゥーサンの保護者としての、現実的判断が要求される事態に直面して、ジムはこの事態に対して勝手な主観的解釈を施し、自分が今直面している事実に対して自らが付与した個人的な意味づけに溺れてしまう。むしろ、自らの生に対する個人的な意味づけを支える機能を果たすという条件を満たすかぎりにおいてのみ、彼に社会的判断及び行動を要請してきた、彼のうちに内面化された社会的拘束力は、彼の個人的意味の領域に対してより強くアピールする声（この場合具体的には、ブラウンに対するジムの個人的判断）の生々しい出現の前に、忽ち沈黙してしまわざるを得なかったのである。

さて、住民たちにとっても、白人の〝ロード〟の作戦の失敗は、ただ単にジムの個人的な判断の誤りを意味するのみではない。そ

れは、信頼に対する裏切りという決定的な行為と看做される。ジムひとりの言葉のみを真実として、この地に成立した〈制度〉は、その唯一の基盤に対する住民の信頼が失われたいま、回復力を全く失い、この地には忽ちにして不安が充満することになる。この不安はただの動揺や混乱にとどまらない。それはまず、ジムの召使いが外出するのが危険であるような事態（三〇一頁）となって明らかになる。すなわち、ジムが、誤ることなき〈制度〉の保護者という機能を果たし得なくなったこのとき、彼を頂点として〈制度〉としての安定性を有していた人間関係は、単に崩れるというだけではない。そこには、完全な逆転が生ずるのである。ジムの側近であることによって一目おかれていたタム・イタム（一九八頁）は、今や、彼の召使いであるからこそ、身の危険を感じねばならなくなったのである。

〝ロード〟という称号を冠せられ、人々の称讃の的となるという事態は、ジムが〈制度〉の存立を確実なものとならしめるという事実に、専らその根拠を有している。すなわち、〝ロード〟であればこそ余計に、その役割の遂行は誤りなくなされることが要請されるのである。そしてこのことは、彼がひとたび〈制度〉の存立を危殆に瀕せしめた場合には、人々の彼に対する評価のこの上ないドラスチックな反転を換起することをも意味している。彼は〝ロード〟として並ぶ者なき存在であったがゆえに、いまや並ぶ者なき裏切者となるのである。

したがって、ドラミンによるジムの射殺は、息子の死に対する個人的な復讐であるばかりではない。それは、裏切者に対する社会的な制裁でもあり、そして何より、彼を中心として構成されてきた〈制度〉の崩壊を決定的なものとする儀式でもあったと考えられるべきであろう。

ある機能を果たすものとしてのみ、ある役割を演ずる者としてのみ、相互に愛し必要としていたジムと住民たちの微妙な関係は、こうして破綻をきたす。というよりも、むしろそれは当然の帰結を迎えたというべきかもしれない。

とはいえ、ジム当人にとって、自らの行為の帰結と、それによって自分のおかれた立場は、我々がいまみた如きものとしては捉えられてはいない。ブラウンに対する対策を誤った結果、彼が最も強烈に意識するのは、自分がもはや他者に対して〝勇敢で誤りなきロード〟としての像を結ばなくなったという事実である。ある社会のうちで自分の気に入ったある役割を担い、それによって他者の信頼をうけることで、自らの人生を個人的に意味あらしめること、且つそのことを通じて、過去の咎によって自らに課された限界を突破することが彼の願いであったことを我々は既にみた。しかしそれはついに叶えられることはないということを彼は知る。つまりジムには、守るべきもの、そのために闘うべきものは、既になにもないのである（三〇二頁）。

しかし、実際には、ジムの〈自己〉は、その生涯に亙る彼独自の闘いをここで放棄するのではない。それどころか、彼はここで文字通り一命を賭して、彼の願望の実現を阻んだ「運命そのもの（the fatal destiny itself）」（三〇二頁）に対して巻き返しを図るのである。すなわち、もはや決定的に〝good enough〟（二三四頁）でなくなってしまった〈自分〉、した

がって自らにとって全く意味を有さなくなった〈自分〉を生きながらえさせることを拒否し、その〈自分〉の容れ物である、同様に意味のない自分の肉体をさし出すことで、〝英雄的〟で〝天晴な〟死にざまを示してみせることが、彼の最後の意志となるのである。我々が前に確認したような、彼の死の社会的意味とは全く別の、個人的な意味を、彼は自らの死に対しても付与するのである。ここでは、死すら、ジムの自らの生に対する個人的な意味を実現するための「機会」として捉えられる。それに伴って、その場に居合わせて、ジムに「誇らしげな視線」（三〇六頁）を投げかけられた住民たちは、ついに最後まで彼のヒロイズムの証人の役を割り振られた訳である。もっとも、いまやこれは、ジムの心の裡における事態でしかないのであるが。

自らの死に対するジムの姿勢は、彼が、最後の決定的な認識のチャンスに於いても、自らの行為がもつ社会的な意味を認識し得なかったことを示すものである。そしてそれはまた、彼の生涯における、自らの行為に対する態度を凝縮した形で示しているといえよう。

Ⅳ　二重化された〈自己〉

我々は今まで、ジムの行為を、彼自らがそれに対して施した個人的な意味と、それが他の諸個人との関係に於いてもつことになる意味との間の乖離に焦点を据えつつ検討してきた。そして、この乖離こそが――もしくは、彼が自己の行為のもつ意味を評価するのは、専ら自己の主観的な観点からのみであるという事実こそが――窮極的には彼に〝自らすすんでもとめた死〟をもたらしたのであったこともまた、既に確認した通りである。しかし、翻って看るならば、このような視角から自分の行為を捉えることは、ジムに固有の〈自己〉観に基づくものであると考えられる。すなわち、ジムは常に自己を、〈今ある自分〉と〈本当の自分〉（本来的にかくあるべきであり、またあり得る自分）という二重の視点から捉えるのである。もっとも、〈自己〉に対するこのような二重の感覚は、我々のだれもが日常的に多かれ少なかれもつものであり、格別珍しいものとは言えないのかもしれない。しかし、我々は、多くの場合は、この〈今ある自分〉と〈本当の自分〉の間に、意識的にもしくは無意識的に、何らかのかたちで折り合いをつけて生きているのであり、それらの間に存する相剋などは、殊更に言挙げされることもないのが普通である。それゆえ、このふたつの〈自己〉が決して統一的なあり方をすることがなく、常に画然と区別されたままにとどまっていること、ここに、〝常人〟のそれとは明確に異なれる、我々の主人公の感覚の特殊性が存しているのである。

我々が前稿に於いて看たように、この二重の感覚は、ジムの経歴の抑のはじめから彼に付き纏っていたのであった。まずはじめは、陳腐な日常的現実のうちに埋没している〈今の自分〉と、いざというときには英雄的な雄飛を遂げるであろう〈本当の自分〉の対比において。船乗りとして人生に出発した彼は、後者の〈自分〉を実現し得るような「機会」を漠然たる期待をもって待ちのぞんでいたのであった。そしてこの次には、卑怯な行為をなした、事実としての〈今の自分〉に対立するものとして、〝内面的事情〟

というコンテクストのうちで捉えられた、〈本質的に〉潔白である〈本当の自分〉が、四面楚歌の状況のうちにおいて、終始繰り返し主張されたのである。

さて、「外の世界」と縁を切ったジムは、今やパトゥーサンを舞台として、少年のころ夢みた、そして「外の世界」においてはついに実現することを得なかった、一大英雄物語を展開することになる。自分に対して周囲がきわめて否定的な評価をくだしたときですら、彼自身は決して忘れることのできなかった、夢と自信のこの現実化は、彼の理想である〈本当の自分〉を〈今ある自分〉に重ねあわせるための条件をすっかり整えてくれたということができるであろう。

ところが、意外なことにジムはこのような〈自分〉に全面的なアイデンティティを見出すことができない。曾て一度怯んだ結果、その世界で一人前の人間として生きていく資格を失った〈自分〉、"good enough"でない人間としての〈自分〉という、曾て自分に下された評価こそ、謂わば永久に望月の欠けたるところとしてジムを悩ませる。自分としても肯定し得るような〝英雄〟としての〈自分〉という表向きの姿の下に、ジムは常に"good enough"でない〈自分〉を強烈に意識するのであり、且つこれをいつの日にか振り払いたいと願うのである。

以上のように考えるならば、パトゥーサンに於けるジムの〈自分〉に対する姿勢は、まず第一に、〝英雄〟たる〈自分〉像にそうような形で、あらゆる機会を捕えて、あるパターンを逸脱しない行動を繰り返すことで、その都度住民のあいだに〝英雄〟としての〝トゥアン・ジム〟という印象を〝生産・再生産〟し、それを彼らの心胸の裡に定着させ、そうすることによってこの〈自分〉像を確固としたものにするように努める、ということになる。そして他方に於いて、そのようにして〝表面的〟〈自分〉が獲得した名声を以て――謂わば、証人たる住民たちを引き連れて――〝表面下〟の〈自分〉を自らに対して覆い隠してしまおうとすること、これが彼の切実な関心事となっているということができよう。住民たちは、彼の心中に於いては、彼の〝表面的〟〈自分〉の謂わば弁護士という役割を担うのである。

こうして、彼の〈今の自分〉は、外面的、内面的と、それぞれ相矛盾するふたつの別の姿を具えるに至る。そして彼自身によって内面的な〈自分〉の姿に"the real truth"(二二四頁)の名が冠せられることにより、ときによっては、外面的な〝英雄〟たる姿の方が仮のものであるという感じを彼自身がもつことすらあるということが、我々には明瞭に看て取れる。そしてここに至り、ジムの〈自己〉のあり方は、この両方の〈自己〉の姿が、ジムにとっていずれも本当であって、かついずれも本当ではない、と感じられるという複雑な様相を呈するようになる訳である。

しかし、"good enough"でない方の〈自分〉を振り払い、目下は単に表面的な姿にとどまっていると思われる〝英雄〟たる〈自分〉に純化したいという、我々の主人公のこの切実なる願望のうちには、ひとつのアポリアがひそんでいる。すなわち、翻って考えるならば、「外の世界」が彼に下した判断そのものを変更することは、もはや「外の世界」と絶縁してしまったジムにとっては、過去のその時点にまで遡って当の判決そのものを取り消すことができない以上、どうあっても不可能であることは明らかで

ある。そして、我々の観点からするならば、この地に於いて生きることを決意した彼にとっては、「外の世界」での評価の変更は無意味であるとは言わぬまでも、むしろそれより、この地に於いて、"good enough" でありおおせることこそ、何にもまして重要である筈である。

ところが、ジムの〈自己〉の二重化は、彼がこのことの認識に至るのを妨げる。すなわち、ジムという人物においては、今のこの現実的な世界に実際に参与している〈自分〉は、〈本当の自分〉と認定されることを、いつも他ならぬ彼自身によって拒まれるのである。彼の理想の〈自己〉は、既に述べたようなそのときどきの何らかの理由によって、常に〈いま〉でない彼岸に於いてこそ実現され得ると彼には感じられるのであり、かくして、彼はついに〈今の自分〉を〈本当の自分〉と重ねることができない訳である。

さらに、〈自己〉に対してこのような二重の感覚を抱き続けるということが必然的にもたらす結果として、彼の眼に映ずる現実的な世界は、自らと接点を保ちつつもあくまでも彼からは独立して存在する外的現実ではなく、彼自身の個人的な意味を付与された〈自分〉が生きる場としてのみ、個人的文脈のうちに於いてのみ、理解されるものとなるのである。したがって、彼にとっての現実的世界は、彼の個人的な理想に対して、一方的に好意的であるかまたは敵対的なものとなる。それは、あるときは、パトゥーサンに於けるように、彼が自らの生に対して付与した個人的な意味を担う、彼の所謂〈本当の自分〉へと至るための手段となるものであり、またあるときは、パトナ号事件に於けるそれのように、その道を塞ぐ障害と看做されるにすぎない。すなわち彼は、現実が比較的に好意的なときにはそれを〈機会〉として、専ら彼自身にとってしか意味を有していないような自らの用に供しようとし、自らに対し否定的なときには、それに対し盲滅法にしかも過度に防衛的な姿勢をとり続ける――"nothing can touch me" という彼の言にみられる如く（一三三、三〇四頁等参照）。〈本当の自分〉に対する彼の異常なまでの固執が、彼に対してこのような、我々からすれば端的に不必要でしかなく、それゆえこれもまた彼以外の如何なる人物にとっても意味をもちえぬような姿勢をとらせるのである。

現実は、常に個人の行為に対して社会的意味――他の諸個人との関係に於いてもつ意味――を付与しつつ、それを自らの進行の〝論理〟のうちへと組み込んでゆく。たいていの場合我々は、自らの行為に対して、個人的観点と社会的観点という複眼的視角をもちつつ、ある程度統一的な視座を設定し、判断を下しているといえよう。ところが、我々の主人公は、個人的意味に極端に偏向した見方によってしか自らの行為を決定或いは判定できないのである。それと同時に、彼は、謂うなればこの現実を見きわめることができず、いつの場合も自分の個人的意味をくぐらせた自分勝手なヴィジョンを被せたものとしてでなければ、現実を把握することができなかったのである。

かくて、現実を自分の型紙にあわせて裁断するとでもいうべき、ジムのこの態度のゆえに、彼にむかって軽蔑的な姿勢をとる人物たちからなされるジムに対する批判は、それ自体としてはきわめ

て直観的、感情的に発せられたものではあるが、このような文脈のうちにおいて解釈されるならば、意外に正鵠を射たものと評価し得るのである。（「ものごとをありのままに見ることができない」というチェスターの嘲笑的な批判（一一九頁等）、「ちいさな子どものようなものだ」というコルネリウスが繰り返し行う批判などを参照されたい。）

したがって、次のふたつの事実は、このような点からきわめて象徴的なことと言わねばなるまい。すなわち、第一に、その低劣さのゆえに、ジムが徹底的に見くびり、無頓着を以て彼に対する最上の対処法とみなした（二〇八頁）コルネリウスによって、ジムの破滅のきっかけがもたらされたこと、そして第二に、ジムに直接の決定的な打撃をもたらすのが、彼が自らの経歴を当て嵌めて、討ち滅ぼすことを差し控えた（が、実際にはジム自身とは異なり、かなり確信犯的な悪漢であった）ブラウンであったこと、このふたつの事実である。如何に卑劣でとるに足らぬと思われる相手でも、状勢がその相手に味方すれば、自らにとって破壊的な合成力を担い得るのであることをジムは認識し得ない。現実は自らのヴィジョンをはるかに超えて、素晴しくもあるかわりに、低劣でもあり得、悪意に満ちていることもあり得る。パトナ号事件以来、ジムがついに全く認めるに至らなかったのは、まさに現実のそのような両義的な性格なのである。

しかし現実はあくまでそれ自身の確たる〝論理〟をうちに秘めているのであり――それは、例のシュタインの比喩で謂うなれば、水の中に落ちた人間に対して抗い難い作用を及ぼす外的自然の諸力のようなものである――いまここに身を置き、（チェスターの言を借りるなら）状況を「とことん見抜く」（一二四頁）ことをしない者に対しては必ず容赦のない報復をするものであることを知らぬ者はない。そしてこの現実の復讐が「圧倒的な運命」の姿をとってなされる（二五二頁参照）のも、このような者たち自身の、現実に対する軽視からでてくる必然的な帰結であるといえよう。ジムに対しては、現実は、コルネリウスとブラウンというふたりの人物を介して襲いかかったのである。そして、ジムが彼らによって足を掬われたことが決してその場の偶然ではないことを――すなわち、彼らは決して〝運命〟の手先でないことを――いまや我々はよく理解し得るであろう。

かつてマーロウがシュタインを訪ねた夜に（それはシュタインがジムに対する忠告をマーロウにむかって述べたと同じ晩である）シュタインが語る蝶の思い出話（一五二―四頁）を我々はここでさらに再び想い起こすべきであろう。卑劣な相手に死んだふりで対処して首尾よく窮地をきりぬけたその直後に、夢にまでみた蝶を捕える機会を得たというシュタインのその話は、現実を見きわめる眼をもち、自分を現実の論理のうちに投げ込むことで、現実を自分の味方にし得る者には、夢を実現する機会は自然に訪れて来るものであるということを、我々に対して――それゆえジムに対しても――語っているのではないのか（ジムのシュタインに対する判断（一七一頁）においてもうかがわれる、現実に対する両者の態度の対照性に留意されたい）。夢を抱き、それを実現させたいと願うきもちに於いては、ジムはシュタインに決して劣ることはなかったということは改めて言うまでもない。しかし、現実に対して硬直的な判断しか下せないジムは、シュタインの具え

ていた夢を現実化する力を、ついに我がものとすることができなかったのである。シュタインの謂うところの「自分の泥の山の上に静かにとどまっていることができない」「ロマンティックな」（一五五頁）人間が、現実の論理のうちで辿らざるを得ない宿命の軌跡を、ジムの生 ― そして死 ― は極端な振幅の大きさを以て描いているのである。

V ＜個人主義＞の宿命

かくて、我々の主人公は、「外の世界」へ向けての現実的なメッセージをしたためることこそついにできなかったが、彼一流の信念にしたがって、〝誇り高き死〟〝潔い死〟を以てそれにかえようとした。しかし、ジムの〝英雄的〟最期に際しての「誇らしげな視線」（三〇六頁）にもかかわらず、常に彼の行為を社会的文脈というもののうちに浸しながらみてきた我々は、それを、恐らくジムが意図したと考えられるように、彼のmoral victoryと単純に看做すことはできないことは改めて言うまでもない。この最期の場面を以て物語を終えることをしなかったコンラッドの態度もまた、そのことを我々に告げているように思われる。

ジムの死という大きな節目を経たのちの物語の進行は、ジムに対するコンラッドのこのような思いを一挙に明示するかの如くである。コンラッドのかかるジム評価を我々に告げ知らせてくれるいくつかの要素のうちで、最も重要なものは、恋人ジュエルによるジムに対する批判である。

ジムの〝素晴らしい死〟に際しての「誇らしげな視線」は、ジムという人物を愛したその恋人ジュエルに対してすらも、如何なる意味も伝えることはない。のみならず彼女はジムを、「戦おうとしなかった」という批難を以て断ずるのである（二五四―五頁）。我々はここに、たんに両者の気質上の差異のみを認めるべきではあるまい。ジムは、パトゥーサンでの生活を＜自己＞実現の「機会」としてしか捉えなかった。否、むしろ彼は、自らの生全体が、「機会」の連続として把握された現実のうちに於いて実現されるのであると考えていたといってよいであろう。したがって、彼にとって他者は、「彼自身が築き上げた影の世界」（三〇七頁）へと自分を導いてくれる通路 ― 全く個人的な虚構の世界の価値を実現する手段 ― 以上の意義をもち得ないのである。そして、自分の意識としては全く掛値なしに〝真剣〟なものと考えていたこの少女への愛（二二三頁）についても、実はその点に於いては同断であったことを彼は最後に暴露するのである。この少女が、他の多くの住民たちと異なり、ジムを、秩序の保護者という役割の遂行者としてではなく、謂わば生身の人間と看做し愛そうとしたことを考慮するならば、彼女こそ、ジムが本来属すべき現実的世界の最重要人物である筈であった。ところが、具体的で現実的な世界を通路として、抽象的で架空の世界に帰属することを冀うこの人物は、いまこことしての現実を象徴するともいえる掛替えのないひとりの女性との関係に、窮極的なアイデンティティの重要部分を認め、これを永続化したいとは願わない。むしろ、パトゥーサンでのはなやかな生活の終焉とともに、ジュエルがジムに対して果たしていた役目は事実上終わったのであるといえる。

如上の観点よりすれば、物語の終わりは示唆的である。ジムの

心情をある程度理解し、彼の生涯にかなり深く関わったシュタインとマーロウは、ジムが彼なりの意味に於いて――すなわち「自ら選んだおぼろげな行為の理想」（三〇七頁）に対しては――最後まで「忠実」（二四六、三〇七頁）で、「真実」（二五八頁）であったことを認めることはできる。しかし彼らは、生（なま）の現実の代表者としてのジュエルを決して納得させることはできない。彼らの思い入れを受けて生きたジムに和解がもたらされることはない。そして、希望もなく空しく生きながらえる彼の恋人の姿こそ、ジムの生涯に於いて決してそれ自身として実現されることなく宙に浮いたままにとどまらねばならなかった〈いま・ここ〉なのである。

結　語

個人主義者にとって、現実は、自分の姿を映し出す巨大な鏡である。そして彼にとっては、他者は、自分の〝価値・徳〟の証人であるべきであると看做される。ときに彼が如何なる姿を呈することがあろうとも――〝勇敢にして誠実なる秩序の保護者〟〝真実の恋人〟等々――彼はただ自分のためだけにそれを演じているにすぎないのである。だが、個人がその行為によって〈制度〉としての社会を支え、謂わば〝生産・再生産〟しているのであり、一方その〈制度〉としての社会が個人に対して拘束力を及ぼすという緊張関係が個人と社会との間に存在し続ける以上、個人の行為は、社会的と個人的との二面を担わないでいることはできない。行為の社会的な面をついに最後まで認めなかった人間の夢とその破産、そして彼の夢が他者に及ぼす破壊力、これをこの作品に則してあとづけることができたとすれば、さらなる課題をあとに残しながらも、本論の目的はひとまず達せられたことになる。

＊　本稿は、もともと、二部形式をとるとも考えられるこの作品の、主として後半部分に関する考察を試みたものである。前半部分に関しては、拙稿「冒険者の夢と〈制度〉としての現実的世界」（『帝京大学文学部紀要』第十三号所収）において若干のたちいった検討を加えた。本論は謂わばそれの続篇ともいうべき性格をもつ。それゆえ、前稿において既に展開しておいた論点に関しては、重複になることをおそれ、最少限の記述にとどめてある。これらの論点に関しては、前掲の拙稿を参照されたい。

＊＊　作品のテキストは〝Dent's Collected Edition〟（London: 1946）を用いた。文中括弧に入れて示した頁数はすべてこの版のものである。尚、文中の引用部分は、部分的に訳しかえたほかは、すべて小野協一訳『ロード・ジム』（八潮出版社、一九六八年）に拠った。